

第3期第15回生涯学習センター運営協議会 議事要旨

〔日 時〕2017年11月27日（月）15:00～17:00

〔場 所〕生涯学習センター 学習室2

〔出席者〕※敬称略

委 員：岩本 陽児、太田 まゆみ、大野 浩子、白崎 好邦、島田 忠次、陶山 慎治、辰巳 厚子、
中村 香、中里 静江、前田 美幸、柳沼 恵一
以上 11名

事務局：板橋センター長、加藤担当課長、小林管理係長、松田事業係長、齊藤主任（記録）

〔欠席者〕上村 まり

以上1名

〔傍聴人〕1人

〔資 料〕

- ・ 町田市生涯学習センター運営協議会（協議スケジュール案）（資料1）
- ・ 生涯学習センター具体的事業の提案（資料2）
- ・ 第3期生涯学習センター運営協議会 報告書 章立て（案）（資料3）
- ・ プログラム委員2017年12月1日付委嘱一覧
- ・ 第10回町田市生涯学習審議会 議事 委員メモ
- ・ 都公連研究大会開催要項
- ・ 都公連役員部会・委員部会の活動報告メモ
- ・ 各委員からの意見レジュメ（資料2の原本）

議題

1. 生涯学習センターの役割と機能について「あるべき（目指すべき）姿」とその「具体策」

会 長：今年最後の会議となり、報告書の作成に向けて具体的に活動する段階に来ている。今日はどのような形でまとめていくかを議論いたしたい。

スケジュール案（資料1）から確認したい。4月から一貫して協議してきたが、従来のものから少し発展させて事業毎にまとめて評価・分析するというを行ってきた。次期町田市生涯学習推進計画に向けて我々の協議した内容が反映されるよう作業を行ってきたわけである。今後1月から3月までであるが、報告書の作成に向けての作業に入る。下期には事業の実績評価もあるのでスケジュール的に厳しい状況である。全員での話し合いが難しい部分もあるので、作業部会を有志で募り、作業を進めたい。

委 員：もともとのタイトルが「生涯学習センターの役割と機能」という、とても大きなタイトルであった。役割と機能というと全てを表すようだが、全部をまとめるのは難しいので2つくらいの視点を取り上げたが、2つだけの視点で行くと、それ以外が無くなってしまいうような気がしてしまうので、それも不安であるので、せめてそれぞれをつなげるような形にした方が良い。

会 長：私もこれらは切り離せないと思う。生涯学習センターのそれぞれの分野で用意されている講座を無視するものではないのだが、今回これを取り上げたのは今まさにそこが不足しており、補充していかないと展望が開けないということで、この2つが注視されている事だろうと思う。ただ、それを切り離して考えてしまうとそれも問題である。地域の課題を解決する学習と地域の人材（財）を生かすというの、相互に関係しながら事業として考えていかなくてはいけないのではないか、というご提案であり素晴らしいと思う。

委 員：ことぶき大学と市民大学を「1本化する」というと、縮小してしまう可能性がある、「発展させる」としたい。また、「生かせない学習」が無意味になってしまう怖さもある。そこで、最終的に職員としてはどうしたいのかを示していただきたい。というのは、このような報告書は職員

がまとめることが多く、市民がまとめるというのであれば、初めから市民に委ねて市民の意見を反映させて作成すればよい。しかしながら、ある程度の方向付けは職員がしておきながら最後は市民でまとめてくださいというのでは、議論をどこに持っていきたいのかがよくわからない。

委員：先生のご意見には共感することが多く、役に立つものに特化してしまうということの危うさを感じる。かつて世界の社会教育がモデルとしたイギリスの経験で申し上げると、イギリスの市民がシェイクスピアについて語れるようになるということは、これは素晴らしいことだから、そのような学習については無料で良いという方向性を出した。一方、自動車というものが出てきて、自動車の整備の資格を取ると、将来給料が上がっていくことから、この学習については受益者負担が良いじゃないかと。受益者負担というのはもともとそういう文脈で語られていた。ところがこの20年くらいの日本でいうと、何か学習すること自体が受益というような、公民館からお金をとるといような変な事態が進行しているのではないかと、ということをお願いしたい。その上で、インプットとアウトプットの循環という考えにとっても魅力を覚えたので、循環を是非作っていききたい。ただ、作っていく以上はその循環はさらに広がっていくような循環でないと。生涯学習を担っているあるいは恩恵を被っている市民というのは、町田の42万人の中の一体何%いるだろうかと、ということがある。もっともっと、シェアを拡大していきたい。

昔イギリスにいたころに、環境教育の機会を受けている延べ人数を調べたことがあった。5600万人のイングランド・ウェールズの国民の約半数であった。それが今から25年前の話である。国民の一定の割合が、社会教育によって学ぶ。そして自分の実現を行い、幸福追求を行っていけるような制度があるわけなので、もっともっと広げていくためには、例えば市民が市民を巻き込んで、行政の他部局と関わりのある市民が、生涯学習というものに開かれていくようなそういうものを創ることを目指していきたい。

比喩で申し上げますと、学校の教員資格を得る勉強には大きく分けて2つあり、1つは教科に関わる勉強、もう1つは教職に関わる勉強である。資料の項目に、行政の他部局との連携というのがあるが、もしかしたらそれに関わるかもしれないが、自然保護、環境、ゴミ処理、福祉といったそれぞれの専門知については行政の各セクションが一番詳しいが、市民にそれを伝えて行動を変えてもらおうという働きかけについては教育ということには位置づけず、普及啓発という位置づけをする。そこにギャップがあるのではないかと。それぞれの専門部局の内容は教科にあたり、それを市民に伝えるときの構えとか成人学習者の学びに関するノウハウはこちらにあるので、それはもしかしたら教職に関わるような専門的知識を生涯学習センターが培い蓄えていると思う。それを上手に合体させることで、住民の自治能力を向上させることに資する事が出来るのではないだろうと思う。教職に関わるような内容というのはおそらくセンターでしかできない事業であると思う。それを積極的に市長部局に対してもアピールしていき、そのノウハウを伝え、一緒になって中身のある連携を作っていくことが出来るのではないだろうか。具体的に、生涯学習審議会の中でも、生涯学習センターが色々な知識を蓄えた人達を地域に派遣してくれることに対する要請がある。

今、公共施設の再編が大きな議論となっているが、もう一つ日本の歴史をみると、ニューカマーがやってきて社会が豊かになってきたという明らかな事実がある。しかし、学校の現場で、最近ニューカマーの集住地域に近いような「いちよう団地」等の校長先生とお話する機会があったが、ベトナム語の通訳が足りないという話を伺った。町田の中にもミャンマーを知る会といったように色々な地域を学んでいる活動がある。日頃学習活動をする中で、その国の言葉もきちんと学び、一定数の人財バンクをつくっていけると、地域の学校で困っている事があれば、必要な手当てを行えるように生涯学習センターが自己改革をしていくのが一つの方向性になるのではないだろうか。

会長：役に立つものだけに特化する事の問題や、生涯学習センターにしか出来ない役割や講師派遣の要請についての説明があった。報告書を誰がどのような形で提出するのかということについて。

事務局：生涯学習計画をこれから作っていくわけだが、生涯学習センター運営協議会は生涯学習教育機関の長である生涯学習センター長に報告をしていただくことになる。生涯学習推進計画の計画立てをするタイミングであるので、生涯学習センターの方向性や事業のご提案をいただきたい。

会長：つまり運営協議会がまとめて、報告書を教育委員会に提出する。そして、生涯学習センターが

行っている事業について意見を述べて今後こういう風にあるべきだという提案をする。それを受けて教育委員会は教育プランなり生涯学習推進計画の中に反映していくということによろしいか。事務局も一緒に作業するというのは、報告書を提出することが必要となっていくので一緒に行うということである。中身については、いくつか項目があげられている中で二つに絞ってより重点的に考えてみようということである。教科と教職というお話にもあったが、両者とも切り離せないものである。教科の部分になるだろうか、資料の中で「地域や関係機関との連携」、「子ども・若者・子育てについて」、「ことぶき大学と市民大学について」といって、3つの切り口について各委員から色々な意見が出されている。では「地域や関係機関との連携」について。

委員：まず、「地域の課題を解決する学習」という「地域」はどこを指すのか。大きく捉えると全国的に「地域力が下がっている」、とか、「コミュニティ力・人との関係力が衰えている」、と言われていた意味での「地域」もあるし、町田という特性の中での「地域」もある。町田には様々な活動団体があるが、その中で、また地区協議会での分け方というところの「地域」もある。広い意味から小さいものまであり、「地域」が何を指しているか明確ではないので、雑多な意見が出てしまう。町田市としてはどういうところに生涯学習センターを位置づけるのか、また、広い意味での人間力とかをどう考えるのか、それを整理し、生涯学習センターとしては、そのどこに焦点を当てたいのか、考えた方がいい。私はどれも必要だと思うが、センター独自でいけるものもあるだろうし、地区協議会での「地域」だと、もっとその地域にフォーカスしてお互いが協力した方がいい場合もあるだろう。

委員：「地域」を定義することは重要である。町田市も色々な部署で「地域」が言われているので、生涯学習センターで「地域」といったときは地区協議会で区割りされる「10地区」を意識すると良い。もちろん内容によってはもっと広域になることもあるが、10地区の課題を見つけ出す方法がどういうものか、ということだと思う。今の町田市では3か年事業が予定されていて、各地域に予算をつけ、オリンピック・パラリンピック等もあるのでそれに合わせ地域を活性化し、そのあとにレガシーを残すことを目指すが、ここでもやはり何を残すかとなれば、人材（財）でありネットワークだと思う。町田市が一番の資源は、シルバー人材センターやボランティアセンターを始めとする、様々な人財なので、これをどう残すか、生涯学習センターがどう関わっていかれるかが役割を考える上で重要である。生涯学習センターも、この3か年事業について、無視はできないと思う。

会長：3か年事業とは、「まるごと大作戦」のことだと思う。1月～3月の間に募集される。

事務局：「まるごと大作戦」の中でもテーマは若い人の定住。若者が力を発揮出来るよう、さがまちコンソーシアムとつなぐというレベルではあるが、生涯学習センターにも協力依頼は来ている。10地区の課題が見えているわけではなく、普及啓発の一環である。周知啓発の講座の組み立てや集客方法を職員の中で研修形式で行う。

会長：生涯学習センター以外でも色々な学習や実践を行っている。自分が何かをやりたいと思ったときに、どこへ行けば何につながるのかが、整理されていない。八王子などはマップがあり、見事に整理されている。生涯学習センターだけが生涯学習に関わっているのではなく、さまざまな団体が担っているということを連携の手順の始めてとして、まとめていく必要があると思う。まずはそこからまとめていくと良いと思う。

委員：まるごと大作戦に参加した際、生涯学習センターで子育て関連の講座に参加した人で講座終了後活動する場＝出口がなかった（どのように活動したらよいかわからなかった）為、今回ここに応募参加したとの話を聞いた。ずっと課題としてきたところではあるが、講座終了後の出口が整っていないということが問題だ。また、組織間（例：生涯学習センターと町田まるごと大作戦）の横のつながりがなく動くと、ロスも多くなるのではないかと。各組織が連携、役割分担して市民の活動の場＝出口を用意すべきと思う。

事務局：庁内連携としては生涯学習連絡会が3年目で、周知啓発事業の講座の組み立て集客方法を職員の中で研修方式でやることを始めている。一つの成果である。中身の組み立てなどで問い合わせをいただくようになってきた。市民協働推進課などと組みながら、学んだ方が活躍する場につないでいけるようにしていきたい。

委員：ここで参加して、初めて理解を深めていったが、町田市に公民館がここしかないということが

大きいと感じる。避難行動要支援者に対して地域がどのように仕組みを作るかについて、やりにくさを感じているところだが、10地区に地区協議会があり情報や人が集約されていて、地区協議会の地域活動室がそう（公民館的な場）になれるかと思ったが、なかなか難しく具体的な事業の提案（ソフト）だけでなく、場所（ハード）も考えていくという意識があるのならば、場所を確保していくということもここでの大きな議論にしていかなければならない。人生を豊かにするための学びは今まで通りここでやっていけば良いが、地域の課題に何があるか、解決する仕組みはどうするかといったこと課題については、地域の場で展開していくことが必要だ。

会長：確かに「場」は大切である。10地区を意識してその中に最低一つの「場」があればいいということである。次に、「地域」に関わってくるとも思うが、子ども・若者・子育てについて焦点を当て「町田版キッズニア」といったようなご意見が出ている。委員から追加、捕捉ありますか。

委員：子ども・若者・子育てももちろんだが、今、地域課題をテーマとする場合、青少年の問題、子どもの問題、環境・福祉・防災・国際交流・スポーツ・文化・歴史・観光といったよう10位の町田にアプローチするためのテーマがある。子育てだけではなく、テーマはもっと広くて良いと思う。

会長：ここでは、教育という観点から対象者を絞ってみようということであるが、テーマは町の中に、確かに一杯あると思う。例えば観光なら、商工観光課との連携も重要かもしれない。生涯学習センターとして、子どもや若者・家庭教育・ひきこもりといったことに焦点を当て、拡げていくことも迫られていると思う。「町田版キッズニア」というご意見も出ていますが、これについて何かありますか。

委員：「子どもミュンヘン」「ミニミュンヘン」という。今回の宿題について、地域課題といった大きな事ではなく、世代間の当事者としての学びのことだと考えた。当事者ではない人を引き込むにはイベントが効果的で、それにより関わりある人も無い人も参加する。市が設置した常設型冒険遊び場は現在3ヶ所あり、私はその内の一つ「せりがや冒険遊び場」という活動の拠点を持っているが、そこには世代も職種もバラバラな人々が集う。それがコミュニティなのではないかと思う。何か拠点があるということで、地域問題の解決になる。それがこの生涯学習センターになると良い。子どもミュンヘンとは、こどもが主体的にまちづくりに励むことである。イベントという見える形で行うことで地域に交流を生み出し、結果として子どもたちが地域づくりに貢献することが出来る、そういった仕掛けづくりが大切だと思う。

委員：子どもの商店があったり、市長さんがいたり、「ミニミュンヘン」と言ったり、職業体験だと「キッズニア」と言ったりする。

委員：体験者といっても、うちでは現金も扱う本気の商売をする。

委員：「田園調布大学」の「新たまりゆり」では現金は触らない。川崎にある「夢パーク」では現金を扱う。オランダの子ども博物館がこうした事業を始めたのは、25年くらい前になる。

会長：若者をどうするかということの手がかりがつかめないでいる。生涯学習審議会でも妙案が無いので、もう少し具体的なものが出れば良いと思う。

次にことぶき大学と市民大学についても、多くの意見が出ている。ことぶき大学と市民大学の統合ということ。基礎コースと専門コースと人材（財）育成コースという考えや、併存しつつ内容を見直す考え方や、市民企画講座の充実・拡大という考えや、イーラーニングの推進、地域問題解決に向けて解決する人財育成や、個人的思考型の学習も残しながらさらにコーディネーターをサポートするといった考えが出ている。私の意見としては、ことぶき大学と市民大学が両方とも発展する形として、ことぶき大学の中に上級コースの町田シニア大学院を新設し、年間3、000円～5、000円程度に有料化にしてもいいと思うが、調べ学習などを取り入れて地域活動のきっかけづくりと仲間づくりの機会を提供して主体的な学習と地域活動の支援を行ってはどうか。従来型の無料講座も、出来る限り地域で行うこととして、将来的には市民大学の卒業生等が維持していける形で進めていく。もう一つ市民大学の中に総合町田学というのを作り、町田市の現状を理解した上で地域の現場を見て歩き、福祉や防災環境の課題を見つけ出し、まちづくりを行うような人財の育成を行う講座を取り入れてはどうか。委員から、大学院の発展形の地域リーダー育成講座という形で立ち上げ、町田を歩く講座地域の学習や1年間の行動計画を立てて発表し合う、それぞれに素晴らしい意見だがこれについて何かご意見はありますか。

委員：以前、『月刊社会教育』で市民大学について特集していた時があった。私は、大学の4年間の中で、3年4年になって自分で問を發しその答えを自分で探し発表・議論するということが、一番面白く、大学らしいと思っているのだが、日本中で行われている市民大学というのは話を聞いて勉強をするというのが主体である。座間では図書館とリンクして「あすなる大学」といって自主的な「調べ学習」をしているが、皆さんの意見に共感を持った。

もう1つ、60代から70代に差し掛かる人はみんな集まってみんなでワイワイ活動することになじんでいるが、新しい世代の人達については積極的に自分一人だけで楽しみを完結するような発想の様式を持っているのかもしれないと思うことがある。ことぶき大学も市民大学も人気が高いが、ある時期まで行くと、受講しようという人がもしかしたらぐんと減るかもしれない。これが単なる懸念だといいが、年齢構成を見ても、70前後の人々には20代30代のころから子育てをしながら公民館活動に関わりを持ってそれから30年40年経ちましたという方が結構いらっしゃる。これに続く世代がどう掘り起こされるのかということを考えながら既存事業を見直すときに来ている。

委員：今のご発言で、若い世代が、公民館活動に対し関心が薄いのではないかということと言われた気がしたが。

委員：そういうところもある。

委員：それは、非常に難しい課題だ。どうやったら引き込めるだろうか。

委員：市民活動は沢山あり、後継者を育てるのは本当に大変なのだが、だからこそ乳幼児を持っている時や、仕事を休んでいるときにきっかけを持ってもらい、こういう世界があったのだということへの気づきと、子どもが思春期にさしかかったときにまだつながりを持てるので、その時期に上手く引き込むことが大切だと思う。乳幼児を持つ親の世代を上手く次につなぐことが大切だと実感する。

委員：この間「冒険遊び場」を見学させて頂いた時も、小さいお子さんを連れた家族が沢山集まっていて、年配者も来ているのを見かけた。こういった場でつながっていくのかなと思う。

事務局：施設を使っている人達も減っている。利用率は変わらないが、団体が小ぶりになっていっている傾向にある。

会長：世代間の傾向が団体活動においても反映されているというのはある程度仕方ないので、その中でどうするかだ。

委員：今の子育て世代も段々我々の想像つかない段階になっている。でも、「まるごと大作戦」にもここに来ないようなファミリー世代も大勢参加していたということを知った。ひょっとしたら、ここでやっていることと違うことを模索しないといけないのかもしれない。「ママまつり」というのが各都道府県で開かれているらしいが、子どもを連れてきてネイルの講座をやったりケーキを売ったりとかするのだが結構人が多い。外に出たいお母さん達がいる、といった発想ややり方を研究していくべきかもしれない。団塊の次の世代だが、団塊の前の世代と団塊の世代とポスト団塊の世代の人とは全然違うのではないだろうかと感じている。生涯学習センターの発想とは違うかもしれないが、「町田愛」を育てる上では、町田散歩学・町田イベント学・町田アート学、町田健康スポーツ学等もう少し皆が入りやすいところから、広い意味かららせん状に深くなっていくような地域課題の取り組み方というのがあっていいと思う。

委員：高齢者だけのコミュニティをこれから作るのは止めた方がいいと思っているので、ことぶき大学の存在に関してはしっかり議論した方が良くと思うが、自分達は今、地域包括ケアシステムを元に地域を支える展開をしていこうというところで、介護保険が高齢者だけのものであったという歴史がずっとあり、高齢者だけが学ぶというのではなく、混ざり合うという努力を、辛いけれどもやっていくことが必要だと感じている。野津田高校の高校生と町田の丘学園の肢体不自由の高校生と、介護予防の職員と要支援の高齢者とポッチャについてチームを組んで行ったが、学んでいる段階から、ものすごい感動があった。同じ年の高校生同士でも、一人は肢体不自由である。どうコミュニケーションしていいかわからないでいたら、そこに高齢者が加わることで、なんとスムーズにコミュニケーションが図れたことだろうか。また、鶴川のウォーキング事業を地区協議会でやっていて高齢者ばかりになってしまっていてこれはいけないなということで、今年はハロウィンでウォーキングということで、ハロウィンの仮装をしてみんなで歩くというイベントに4

00人の申込みがあった。当日台風で120人くらい減ってしまったが、逆に失敗だったのが、高齢者がほとんど来られなかった。混ざり合うことはなかなか難しいが高齢者だけでやっていくしかない、ということにしてしまわないようにしないといけないのではないかなと思う。

委員：市民大学の理念「あなたを励まし、地域を育てる」という理念そのものも変えた方がいいかもしれない。25年経っていて、市民大学の見直しを根本的に変えていく方がいいと思う。市民大学に参加する年代は平均年齢70代といっても、80歳に近いのではないかな。いろんな団体も年齢層が高くなり、人も入ってこない。市民大学が終わって勧誘に行こうとしても入らない。65歳ぐらいまでは働かなければならない世代になっている。50代はというと、本当に興味のある人はネットやパソコンで発信すれば、必要なことは拾える。何かあれば自分達で調べられる。生涯学習センターを使わなくても良い。生涯学習センターと書いておきながら公民館と両方あるのが非常に皆にわかりにくい。町田市民にとってわかりにくい。109というわかる人もいる。公民館の名前についてはいろいろあるのだろうが、地域のセンターを使って地域を発展させれば良いのではないかな。生涯学習センターはその集約の場となればいい。子ども達を見ている閉館するまでの10時ぎりぎりまで試験に近い子などが勉強している。生涯学習センターに勉強する場があればもっと口コミで広がるのではないだろうか。もったいないと思う。来るきっかけというのが大切だし、将来につなげるきっかけになるのではないかな。

委員：市民大学やことぶき大学の年齢層が近いというのももちろん大きな理由の一つだが、もう一つ、今までのそれぞれの学習領域やテーマを、きちっと整理して発展的に再編し直してはどうだろうかというのが私の考えである。更に、市民大学の「人材育成コース（新規）」がポイントである。出口の部分が良く見えないというのが従来からの課題だったと思うので、そこをどうするか考えた場合、これまでの一般教養型の講座から、市民大学に新しいコースとして、つまり社会貢献だとかボランティア活動に情熱のある人だとか、講座の修了者といった方々を集めて、福祉等に特化したような講座を行い、どんな課題があるのかを、それぞれが議論の中で探究し、それに対して自分はどのようにかというようなことを学んで、活動分野について卒論としてまとめ、卒業後は実践に出ていくということが必要なのではないかなという意味である。高齢福祉課の係長による介護予防生活支援実施計画の話の中で、今後は地域の中で支え合う体制づくりが課題だと聞いた。従来の専門家だけでなく、ボランティア活動等を目指す人材（財）の育成が重要になって来るという話を聞いたので、生涯学習となにか結び付けられないだろうかと思った。

委員：認知症サポーター養成講座というのをやっているが、参加して下さった方は三つぐらいのグループに分かれる。認知症が理解できて良かったという人、明日から認知症の方に出会ったら、こういう風に行動しようという人。明日から認知症の人に対して何かをしたいという人がいて、そのための認知症サポーター養成講座のステップアップ講座というのがあり、それを修了すると我々と共に活動してくれませんか、と待っている団体がある。そこにさらに専門性をプラスしていくには、少人数になるかもしれないが、こちらの希望としては、そういった部分で生涯学習センターが関わってくれたらと思う。

委員：そのことについて言えば、例えば、社協でも傾聴ボランティアをやっていて、修了したら活動団体を紹介している。同じようなことを色々なところでやっているとなってしまうので、同じ町田なのでどこかでまとめてやった方が効率的ではないかな。

市民大学については、現状は「聞いたら終わり」である。昔はもっとテーマを持って学び、レポートなども出していた。大学等で扱うような難しいテーマも学習していた。それが、「もっと人が集まるような講座を作れ」と言われ、どんどん内容も簡単になっていってしまった。修了証の渡し方も、昔はわざわざ課長が来て「お疲れ様でした」と労いの言葉を述べるような、もっと重々しいものだった。今は、「いる人いますか」という感じで、いらなかったら終わり。このような現状なので、やはり市民大学の抜本的な見直しが必要なのではないかなと思う。

会長：最後に事務局の方で何かありますか。色々な案が出ていますが、プログラム委員も決まっていますし、すぐに改革は難しい。どうお考えか。

委員：ここは、本当はとても重要なところだ。行政として何をするかを見せずに、意見だけ出させてそれを何も反映させないというのは。

委員：私もそこが聞きたい。まず行政側がどういう姿勢なのか知りたい。

会長：市民大学とことぶき大学の改革案について、どのような意見をお持ちか知りたい。

センター長：正直なところ、職員同士じっくり話し合う機会が少なく、事業をやるのが精一杯である。そこもある意味課題である。町田市には43万人の市民がいるが、公民館のような社会教育施設は1館しかない。現在人気のある講座も多く開催しているが、予算も限られてしまうので、期待も高く改良したいが、もっと広く多くの人に情報や講座を提供できて生涯学習に参加していただけるかを、考えていきたい。限界も色々あるが、ここで計画を作るので、チャンスであると思う。

会長：腑に落ちる案が出れば改革も可能ということか。大改革は難しいということだろうか。

事務局：事務局という意見ではないが、仕組みづくりをする部署なのか、実践をしていく部署なのか迷っている部分がある。市民協働推進課は仕組みを作る部署である。まちチャレをやる中で、生涯学習センターは、他部署より、より「実践」をしているが、そこをとらえたときにどっちの役割を担うのかは正直定まっていない。

委員：両方一緒に考えていかななくてはいけないと思う。先ほども、例えば世代交流だとか地域包括ケアシステムと絡めていく必要があるという話が出ていたが、これらは仕組みの問題である。そういうことをするには、これまでの考え方を変えていかなければいけないのに、議論全体の流れは基本的には既存の講座の改革についてだ。今のセンター長の話も、やはり講座についての話であったので、そういう視点で考えている限り、公共施設の再編等を考えると、この存在価値はいずれなくなってしまうと危惧している。生涯学習センターは1館しかない。教育プランや推進計画に総花的なことをいくら言っただけで取り入れられない。どうしてもっとピンポイントだとか、今までの枠組みを超えることをしなかったのかが一番残念だ。生涯学習センターだけでしかできないこと、自前だけでなく連携してできることを考えればよかった。

会長：過去形にならずとも、これからでも。

委員：もう回数もない。もしもことぶき大学と市民大学を統合とか発展させるというのなら、それだけを考えないと、全部やっけては何もやらないことになる。

会長：報告書としては、これまでの出された意見は全部取り入れようかと思うが。

委員：全部入っているようで全部入っていない。総花的な感じである。

会長：資料3についての議論に入りたい。町田市生涯学習センターの役割と機能について（報告書）の章立て案として。「1. はじめに」では生涯学習センターの役割と機能について協議するに至った経緯を。「2. 生涯学習センターの現状と課題」では①現状と②課題、そして③生涯学習センターを取り巻く環境の変化について。「3. 期待される役割と強化すべき機能」ではピンポイントになるかどうかはわからないが、色々ある中でも、①地域の課題を解決する学習と、②地域の人材（人財）を生かすというものが議論されてきた。なぜこの二つを選択したかも、報告書の中に盛り込む。この章立てについて、ご意見をいただきたい。

委員：章立てについての話の前に、先ほどの説明の中で、「結局大きいことはできませんよ」と言われたと感じた。「結局これまでの会議はなんだったのだろう。」と思っている。「ことぶき大学と市民大学の再考・再編の検討の必要性」については、前運営協議会でもあげていたそうだが、現運協に替った時（私のような新メンバーには）その話はされていなかったと記憶する。（もし私の記憶違い、聞き漏らしがあったらお詫びするが）同じ議論を繰り返すことになってしまいとても残念な思いが正直ある。結局「大改革は難しい（できない）」と受け取るべきなのか。

会長：そんな事はない。ゼロではなく、生涯学習推進計画に反映する。

委員：これからも継続して考えていくということになるのか

会長：引き続いて話し合っていくので、無駄ではなかったと信じたい。

委員：私も信じたいが。

委員：まとめようというのではなく、まだ課題は出てくるので、今の課題をとにかく出すということかどうか。まとめてしまうのは危険ではないか。

委員：資料2のA3にまとめられたような意見について、このデータの中には今までの活動計画にとって大きく方向を変えなければいけないこともある。まずはこのデータを素直にまとめることが

大切だと思う。変化に耐えうる中身もあるので、一回整理して皆さんの意見をまとめたらいいのではないかと思う。

会長：ゼロよりはいくらかプラスのほうがいいのでは。まとめ方はどうするかだと思うが。

委員：きれいな形に整わなくても、このような意見が色々出ました、という報告書にしたらどうか、と思う。

会長：みんなが納得してという意見ではないので、ここまで検討したということを示すべきだと思う。

委員：2年前もこういった課題を出したが、また今回もこういう形で被っちゃって出すというのは。

委員：入り口が違ったのではないか。2年前の答申にあまり触れずに、生かさずに来てしまったと思う。役割とかあり方について、組織を学ぶところから始まり、今後また同じことを繰り返すことになり、この二年間は、何だったのだろうか、となるのではないか。

会長：会長としての私の責任が大きいのですが、お渡しした資料の中の「新規事業に関する検討経緯と考察」で示したように、2016年3月に提出された答申案を踏まえて今回の改革案をまとめた。

では、時間も残り少ないので、資料1にある今後のスケジュールとして、全員は難しいと思うが、報告書検討部会を有志で募り、2回ほど報告書案を練ってみたい。

委員：まとめ方をやるのか。

会長：資料3を精査して素案にそったものでいいかどうか検討したい。

(委員の参加を募り、日程調整を行う)

では、検討部会の日程は12月19日午後及び1月15日午後を予定する。

次回第16回は1月29日(月)午前10時~12時、第17回は2月19日(月)午前10時~12時。最終回(臨時会)は3月19日(月)午後3時~5時を予定している。

2. 報告事項

(1) センター長報告

センター長：市民大学HATS修了者団体紹介の冊子の配布

11月の教育委員会で、プログラム委員の委嘱について議案を出した。

市民大学のプログラム委員が変わったので報告いたしたい。プログラムも変わって陶芸の講座が今年度いっぱい終了する。プログラム委員は環境と自然のプログラム委員とを一緒にする。センターが出来てから1年ごとに任期を重ね、更新は4回までということで、今年度で5期目となる方が多く、環境は全員5期だった。いっぺんに変えてしまうと、継続性が保てないので一部再任をお願いすることとした。市民大学のプログラムの作成に、プログラム委員は重要な存在で、長年勤めてこられた方々が受講者の満足度の高い講座を作ってきたのだが、ここで新たな形でのプログラム会議を模索していく。市民大学については計画の策定も見据え、体制の見直しを含め検討していく。

会長：委員の人数は減ったようだが。

センター長：40人から26人に減った。

委員：プログラムの修了者の選考基準と任期も変わったことについて説明が必要では。

センター長：選任要領を改正した。大きな区分について学識経験者と修了者がおり、学識経験者は今まで通りであるが、修了者に関しては人数も多いので、2回更新の3期までとする。修了者について選び方は要領で決めているわけではなく、44団体の修了者団体があるので、それぞれ活動されている中から選んでいただく。今後も改良の余地があるが、今回はこのような形で行きたい。

(2) 生涯学習審議会についての報告

委員：10月16日の生涯学習審議会について、議事録メモにあります。生涯学習センターに期待したいという会長発言があったこと、ボランティアの育成をして地域へ入れて欲しいという要望がある。また、生涯学習センターで、色々な世代の交流・討論会をやってはどうかといった意見が出た。

会長：4つの柱について記載がある。これについて捕捉する。

- ① まちづくりの住民参画の促進
- ② 地域・家庭・学校の協働による教育活動の推進
- ③ 一人ひとりの知識や技術が地域で生かされる社会づくり
- ④ 地域文化の創造・継承

この4つを柱に答申をまとめられるという方向性が示されたということである。

(3) 東京都公民館連合会の報告について

委員：A4の資料をご覧ください。11月16日に西東京市にて役員会が、昭島市で22日に役員部会があった。

・研修会について。初任者研修を前期と後期2回実施しており、非常にわかりやすい内容で参加者からの評判が良かった。できるだけこういう研修会に目を通して頂いて、関心があるものについて、今後ご参加していただければ自費であるが、十分に見合う内容である。

・今後の研究大会等の予定について。第40回全国公民館研究集会東京大会が11月1日～2日にある。2020年は、第41回公民館研究集会と第59回関ブロ大会の同時開催が栃木県で2019年の8月22日～23日開催される。8月に毎年行われてきたが、オリンピックの開催年なので宿泊所の確保が出来ない可能性があるため11月中旬を予定している。

・文部科学省の「平成30年度機構・定員要求の主要事項」で、現行の生涯学習政策局が総合学習政策局に、社会教育課は地域学習推進課に統合されることになった。これについて、全国公民館連合会その他から文部科学省に対し要望書が出されている。その内容は、社会教育を「地域学習」として集約することには無理があり、社会教育の衰退を招く恐れがあること。各自治体の名称との整合性がなくなり混乱すること。第3期教育基本計画の内容でも社会教育についての取り組み内容が明確ではない、というものである。社会教育課が生涯学習に変わったときも非常に混乱したが、またここで地域学習に変わると問題があるという指摘が出ている。

・その他、都公連の伊東顧問より、東京都の公民館の今後のあるべき姿を、大局的に研究する必要がある。固有の問題が出てきたときに対応できるようにしたほうが良いので、学識経験者が会議する機会がつかれないだろうか、という提案が出た。

・パンフレットをお配りしたが、2月3日(土)第54回東京都公民館研究大会にも是非参加されたい。委員部会では第4分科会のグループ討議の検討を行っている。

会長：2月3日(土)の研究大会は狛江市で近いので、是非ご参加されたい。